

LECTURE

講演会報告

大学

第3回では記者として朝日新聞に35年勤められた竹信先生が日本社会における女性の働きにくさについて数々の統計データを示しながら講演されました。男性でもとくに若い人たちの間で非正規比率が増加してきました。社会のしくみを変えていく必要があると強調されたのち、海外の事例紹介と幸せに働くための10カ条でしめくられました。



第2回には社会政策、労働・貧困問題に詳しい伊田先生がお話しされました。使い捨て非正規労働者が増加してきた一方で正規でも過酷な労働が強いられるようになつてきたことなど労働市場の変化を説明されました。事例の紹介によって働くときに知っておくべきことをわかりやすく示してくださいました。

本学では近年、人生を長期的な視野でみるキャリア教育に力を入れています。働くことを考えるときジェンダーにも目を向ける必要があることが学べる連続講座を開催しました。第1回では福沢先生が1980年代後半以降の女性が働く環境の変化を紹介されたのち、現在の雇用環境とこれから25年で変わりうることを予測されました。現状をふまえ「なりたい自分」になるための実践的なアドバイスもくくださいました。

- ジェンダー・女性学研究所主催
第4期連続講座
「キャリア・労働とジェンダー」
- 第1回「女性のキャリア形成」
講師：福沢 恵子氏
(昭和女子大学客員教授)
6/14 長久手キャンパス
- 第2回「<働く>ときの完全装備
—働く前に考えておくべきこと」
講師：伊田 広行氏
(立命館大学大学院非常勤講師)
6/20 長久手キャンパス
- 第3回「女性活用小国のカルテ—
しあわせに働くために何が必要か」
講師：竹信 三恵子氏
(和光大学教授)
6/28 星が丘キャンパス

メディアプロデュース学部では、NHK名古屋放送局編成部アナウンス責任部長の近藤富士雄氏をお招きし、「伝えること」の奥深さについてお話しいただきました。これからメディアについて学んでいこうとしている1年生を中心に、300人ほどの学生が耳を傾けました。



近藤氏は、アナウンサーとしての20年のご経験をもとに、地名や愛の告白の仕方など、私たちの日常のなかにある、「伝えること」を意識するためのヒントについて示してくださいました。

他にも、活字を読むことの大切さや伝わりやすい「間」の取り方など、多彩なエピソードとともに日常にも活きる、伝えるためのプロのコツを伝授してくださいました。近藤氏は、最後に、「一番大切なのは、伝えることの難しさを知っていること。それぞれが慎重にベストをつくして伝える方を考えてほしい」と締めくくりました。

大学生活を経て社会へと巣立っていく際、誰もが直面するコミュニケーションの難しさや大切さについて考える上で、アナウンサー志望者のみならず参加した学生全員にとって示唆に富んだ講演会となりました。

メディアプロデュース学部では、NHK名古屋放送局編成部アナウンス責任部長の近藤富士雄氏をお招きし、「伝えること」の奥深さについてお話しいただきました。これからメディアについて学んでいこうとしている1年生を中心に、300人ほどの学生が耳を傾けました。

- メディアプロデュース学部講演会
「伝えるということ」
NHK名古屋放送局編成部
アナウンス責任部長 近藤富士雄氏
6/22 長久手キャンパス



紅野先生は、日本近代文学を中心に、メディア論や文化研究といった幅広い領域をご専門とされ、「書物の近代—メディアの文学史」(ちくま学芸文庫)や「投機としての文学—活字・懸賞メディア」(新曜社)などのご著書があります。



今回の講演では、中里介山『大菩薩峠』が話題の中心となりました。本作は、28年間にわたって書き続けられた長編小説です。その面白さを一言でいうならば、物語や登場人物の(無茶苦茶さ)だといえます。そして、その(無茶苦茶さ)は、介山がこの作品を書籍や映画などの様々なメディアに展開させてゆく過程にも見て取れるそうなんです。介山は挿絵の著作権をめぐって争い、また舞台化の演出にも口を出してゆきます。それは彼の偏屈さに起因する、些細なトラブルです。しかし見方を変えれば、そこに当時の文化意識を透かし見ることもできるのだといえます。本作はまさに(歴史的文化的な結晶体)であり、それを読解する楽しさもあり、また、大きな魅力であることをお話しいただきました。

会場には160人ほどの学生が集まり、真剣に耳を傾けていました。文学の魅力や面白さは、物語の(外側)にも広がっていることが学べた講演会でした。

- 文学部国文学科企画・国文学会運営
第3回文学部講演会
「私にとって文学の魅力は何か
—中里介山を例に—」
日本大学文理学部教授 紅野謙介氏
7/2 長久手キャンパス

